FUTURE EVENT 01

2018年度デザイン領域企画展「ヨーロッパ自動車人生活」

2018年11月2日[金]−13日[火] 会期中無休
平日12:15−18:00　土日10:00−18:00

デザイン領域カーデザインコース2018年度特別客員教授・永島譲二氏の展覧会「ヨーロッパ自動車人生活」を、アート&デザインセンターにて開催します。

永島譲二氏は、1955年東京生まれ。武蔵野美術大学工業デザイン学科卒業後、アメリカに渡り大学院に進学。1980年からアダム・オペルでのコンセプトカーのデザイン、1985年にルノーでの「サフラン」のデザインを手掛け、1988年より現在まで、世界屈指の高級車ブランドBMWにて、Z3ロードスター、5シリーズE39型(ともに1996年)3シリーズE90型(2005年)3シリーズGT(2013年)など、有名な作品を残されています。

カーデザイナーとしての活動以外にも、カーデザイン史の研究者でもあり、カーデザインの歴史に関する著作「名車の残像」や、カーグラフィック誌で連載していたエッセイとイラストをまとめた「ヨーロッパ自動車人生活」などの著作があります。

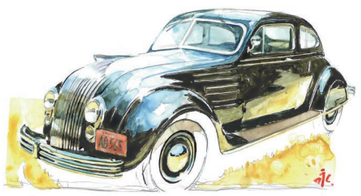
本展は永島氏がカーグラフィック誌で20年に渡り連載した「駄車・名車・古車　デザイナー的見解」の水彩画を中心に、貴重な作品の数々を展示します。カーデザインの変遷を永島氏のユニークなコメントとともにお楽しみください。

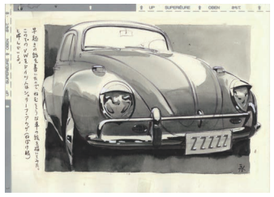
会場 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
主催 名古屋芸術大学アート&デザインセンター
企画 芸術学部デザイン領域カーデザインコース
協賛 株式会社Too
後援 株式会社カーグラフィック

デザイントーク「ヨーロッパ自動車人生活」

講師 永島譲二 氏
2018年11月10日[土]13:00−14:30　名古屋芸術大学B棟2F大講義室
◆参加費 3,000円(展覧会図録代、懇親会費を含む。名古屋芸術大学在校生は無料)
◆定　員　120名(定員になり次第受付を終了)

◆申込方法　9月20日−10月31日の期間中に氏名、連絡先メールアドレス、電話番号、所属、役職などを明記のうえ、　cardesign@nua.ac.jp　までお申し込みください。
※講演会後、15:00より本学学生食堂にて永島譲二氏との懇親会を行います。





2018 09 — 2019 03 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15−18:00(最終日は17:00まで)日曜休館　入場無料　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

9/21 金→ 9/26 水	先輩・後輩展 —久野利博と教え子たち—
9/29 土→ 10/ 8 月・祝	2018年度美術領域企画展「ビヨンド・ワンダー —さまざまなユートピアへの眼差し—」
10/12 金→ 10/17 水	Agnieszka Golda and Martin Johnson 'Slow Force'
10/19 金→ 10/24 水	洋画1コース&彫刻クラス展
10/26 金→ 10/31 水	書道アート展/洋画2コース4年5人展
11/ 2 金→ 11/13 火	2018年度デザイン領域企画展「ヨーロッパ自動車人生活」
11/16 金→ 11/21 水	MCDデパートメント2018
11/23 祝→ 11/28 水	大学院レベルの交流展(仮)
11/30 金→ 12/ 5 水	メディアデザインコース展
12/ 7 金→ 12/12 水	こどもの空間 絵本と家具/2018年度後期交換留学生作品展
12/14 金→ 12/19 水	洋画2コース2年3年生 選抜展(仮)
1/ 4 金→ 1/ 9 水	アートクリエイターコース 陶芸・ガラスクラス2・3年生合同展覧会「工芸展」
1/11 金→ 1/16 水	日本画3年作品展
1/18 金→ 1/23 水	幼稚園児たちのゲイジツ/Hand hospeace 医療と美術2018
2/1 金 2 土・7 木 8 金	大学院1年生作品公開展示
2/16 土→ 3/ 3 日	第46回名古屋芸術大学卒業制作展・第23回名古屋芸術大学大学院修了制作展

編集後記

この編集後記を書いている8月半ば、東海地方はほぼ連日の猛暑日が続いています。名古屋でもついに40度を越える日が出てきて、これからの日本が心配です。先日企画展の関係で2回東京へ出張に行きましたが、東京も灼熱の暑さでした。このままだと人はどんどん暑さに強くなって、将来的に40度なんて普通になってしまうのでは…いっそ早く普通になってしまいたい。そんなふうに思っています。

市原萌絵(アート&デザインセンター)

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

名古屋芸術大学 Art & Design Center
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL[0568]24-0325　FAX[0568]24-2897
B!e Vol.49
発行日　2018年8月31日

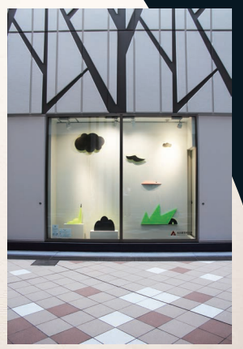
編集・発行　名古屋芸術大学アート&デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp
2018　Printed in Japan © Art & Design Center, Nagoya University of Arts　デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS ART & DESIGN CENTER NEWS 49

サテライトギャラリー「Gallery BOX」誕生

2018年6月16日(土)、名古屋市中区栄にある商業施設「テラッセ納屋橋」内に、名古屋芸術大学のサテライトギャラリー「Gallery BOX」が誕生しました。このギャラリーは、同じくテラッセ納屋橋内にある名古屋芸術大学地域交流センターの関連事業としてスタートを切ります。名古屋芸術大学の卒業生、在学生、教員など本学ゆかりの作家による作品展示と販売の場を創出し、またアートマネジメントの実践を通して地域の人々へ芸術の魅力を発信していくことを目的として作られたスペースです。

年に3〜4回程度の展示入替えを予定しており、第一弾として6月16日(土)〜10月4日(木)までデザイン科メタルコース(現デザイン領域メタル&ジュエリーデザインコース)を2004年に卒業された下西春菜さんの展示「曇天　—小さな世界—」を開催中です。彼女の作品は、鉛やウレタンを使い、物の姿かたちを単純化した形態と鮮やかな色で表現しています。「一つの物事にはポジティブとネガティブという二面性があり、ポジティブとネガティブは二つで一つの物事を成す。これは世界の理である」、この考えを主軸に制作をしているという下西さんは、単純化したモチーフの形態を記号と捉え、それを空間に配置することは地図や俯瞰図を作ることに似ていると言います。出来上がった空間は型抜きされたお菓子の生地のようなシンプルなかたちで彩られ、ライトに照らされた作品の影までもが作品の一部となって佇み、観る者の目を引きつけます。ギャラリーのある場所は施設に面した高層マンションのエントランスでもあるため、24時間鑑賞できるショーウィンドウスペースになっています。間接的に自然光が入り、朝と夜、晴れの日と雨の日ではまったく違う顔を見せてくれる作品です。



Information
名古屋芸術大学　Gallery BOX
〒460-0008
愛知県名古屋市中区栄1丁目2番49号
テラッセ納屋橋2F通路 ショーウィンドウ
アクセス・・・・ 名古屋市営地下鉄東山線・鶴舞線伏見駅より徒歩7分、名鉄名古屋駅より徒歩15分

名古屋駅と名古屋市営地下鉄伏見駅の中間に位置し、納屋橋の東側にある「テラッセ納屋橋」は、スーパーやフードコートも有するため、ビジネス街ということも相まってお昼どきには特に賑わっています。名古屋駅からも伏見駅からも徒歩で来られる立地であること、そして近隣は名古屋市美術館や劇団四季、画廊やギャラリーもたくさんありますので、芸術の秋は名駅〜栄間のアートめぐりツアーなどいかがですか?

「希望する家」2014年

「草葉の陰」2015年

「旋回鳥」2017年

曇天 —小さな世界— 下西春菜
2018.6.16sat-10.4thu

主　　催:学校法人名古屋自由学院
施設運営管理:名古屋芸術大学地域交流センター
展覧会運営管理:名古屋芸術大学アート&デザインセンター
連　絡　先:名古屋芸術大学
TEL [0568]24-0325 / E-mail gallery-box@nua.ac.jp

お知らせ
次回展覧会のお知らせ
10/13(土)〜12/24(月・祝) 泉奈穂「水端」

ビヨンド・ワンダー
—さまざまなユートピアへの眼差し—

本企画は、展覧会のエスキス（Esquisse of Exhibition）として、トーキョーワンダーサイトでプロジェクトをご一緒する機会を得たアーティストのみなさんと、名古屋芸大の学生のみなさんと、ユートピアについて考えるラボラトリープロジェクトです。

3.11をきっかけに、人間と社会、コミュニティ、希望、未来のあり方を考え直す事になって以来、ユートピアについて考えることが多くなりました。1989年のベルリンの壁崩壊、冷戦終結による急速な共産主義の衰退を引き金に、政治思想、イデオロギーの力が弱まり、ニューリベラリズムに代表される現実追認拝金主義が世界を保守化、硬直化し、あっという間に世界中では独裁者の時代の再来と言えるぐらいの時代に突入してしまいました。同時にAIが人間の仕事に取って代わる時代となり、人間とはなにか、人間と社会の関わりを再考しなくてはならない時代を迎えています。

トーキョーワンダーサイトでの協働スタジオプログラムOn Site Labでも、アートの課題On the agenda of the Artsでも考えてきた課題ですが、そのような時代の中で、ミヒャエル・エンデの言葉である「わたしたちにはポジティブなユートピアが必要だ」という言葉がここ10年、ずっと気になっています。

「ユートピア」を考えることは単に夢や理想を描くこととは異なり、人間にとって、それをどのように考えていくか、実現してゆくか、というプロセスそのものが、ユートピアの意義であり、その道こそがユートピアではないか、と思います。

思い返すと、「失われた10年」のなかから、新たな動きをつくろうと始まったワンダーサイト。2001年に先立つ90年代後半も阪神淡路大震災、オウム真理教によるサリン事件など、私達の社会を根本的に考え直さねばならない大きな事件が起っていました。トーキョーワンダーサイトは私達にとって一つのユートピアを目指すプロセスだったのではないかと思います。

2001年から2013年までの間に、アーティストと一緒に作り上げたプロジェクトは、未だに社会に大きな問いを投げかける重要な作品だと思います。その作品と、新たなユートピアに向けてのプロジェクト案のエスキスを提案頂き、作品とエスキスを展示します。ぜひこのプロジェクトがユートピアを考え直す機会となり、美術大学から新しい流れが生まれることを願っています。

今村有策・家村佳代子

＜参加予定アーティスト＞

国内 栗林 隆、大巻伸嗣、鈴木ヒラク、田村友一郎、下道基行、mamoru、藩 逸舟、オル太、二藤健人、遠藤一郎、桑久保徹、鬼頭健吾、竹村 京、荒木 悠、千葉正也、岩井 優、河合政之、瀧健太郎、永岡大輔、一柳 慧、照屋勇賢、津村耕佑、川久保ジョイ、雨宮庸介、岡田幸三、渡辺裕紀子、志津野雷、木戸龍介　他

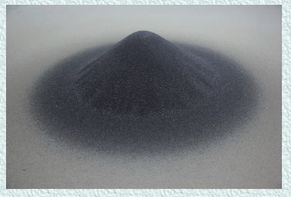
海外 ヴィック・ムニーズ（ブラジル）、ボスコ・ソディ（メキシコ）、ディン・Q・レ（ベトナム）、チョン・ジュンホ（韓国）、ムン・キョンウォン（韓国）、クワイ・サムナン（カンボジア）、ウィット・ピンカンチャナポン（タイ）、ペドロ井上（ブラジル）、ビッター / ウェーバー（オーストリア）、ショーン・グラドウェル（オーストラリア）、ヴァルタン・アヴァキアン（レバノン）、ヨンヘチャン重工業（韓国）、クラウディア・ラルヒャー（オーストリア）、ウー・ダークン（台湾）、イスワント・ハルトノ（インドネシア）、マルワ・アルサオニス（レバノン）、イルワン・アハメット+ティタ・サリーナ（インドネシア）キャシー・ミリケン（オーストラリア / ドイツ）、ヌール・アブアラフェ（パレスチナ）、アン・リディアット（イギリス）、クリス・ウェンライト（イギリス）　他

プロデューサー：今村有策　（名古屋芸術大学特別客員教授、東京藝術大学教授）
キュレーター：家村佳代子（Director of takibi/Institute of Arts and Culture）

多くの若手アーティストを輩出したトーキョーワンダーサイト。
ビエンナーレやトリエンナーレなどの国際展で活躍するアーティストも国内外問わず多数輩出しました。
16年間にわたる活動に関わったアーティストは3000人を超えます。ワンダーサイトはなぜこんなにも多くのアーティストの活躍をバックアップできたのか？
ワンダーサイトが目指したものは「これまでにとどこにもない場所＝ユートピア」だったのかもしれません。
そこでは世界中からアーティストが集まり、作品を制作し、リサーチし、共同し、学び、対話し、食べ、飲み、笑った。
ユートピアは、夢物語と思われるかもしれません。しかし、歴史上、多くの絵画や文学はユートピアを描いてきました。
世界中に対立や紛争、そして混迷が続く現在こそ、ポジティブなユートピアを描くことが重要だと考えます。
ワンダーサイトが多くのアーティストを輩出したのは、このような問いを参加するアーティストたちと
一緒に考えてきたからだと思うのです。（今村有策）

Beyond Wonder
-Perspectives of Utopia-

ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ（韓国）「News from Nowhereの一つのフィルム作品 “El Fin del Mundo”から MVRDVとの協働による“未来都市”」2012年


大巻伸嗣（日本）「絶景」2009年

鈴木ヒラク（日本）「bacteria sign #44」2016年

栗林 隆（日本・インドネシア）「Nepal Yatai Trip」2011年

ボスコ・ソディ（メキシコ）「Muro “World without walls”」2017年

2018年度美術領域企画展
「ビヨンド・ワンダー
—さまざまなユートピアへの眼差し—」

2018年9月29日［土］-10月8日［月・祝］　会期中無休
平日12:15-18:00 土日10:00〜18:00
◆会　場　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
◆主　催　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
◆企　画　芸術学部美術領域洋画コース

フォーラム「さまざまなユートピアへの眼差し」

登壇者：大巻伸嗣（アーティスト、東京藝術大学教授、名古屋芸術大学特別客員教授）、
栗林 隆　（アーティスト、武蔵野美術大学客員教授）、遠藤一郎（未来へ号ドライバー）他、
今村有策、家村佳代子（モデレーター）
2018年10月8日［月・祝］　14:00-16:00
◆会　場　名古屋芸術大学B棟2F大講義室
◆定　員　120名
◆申込方法　10月5日までに氏名、連絡先メールアドレス、電話番号を明記のうえ、
adc@nua.ac.jp までお申し込みください。
登壇者は変更になる可能性があります、ご了承ください。

Report 1　「芸術教養レビュー第1回展」
2018年7月13日［金］−18日［水］

芸術学部芸術学科の芸術教養領域、開設2年目の前期を終えるにあたって、これまでの成果をラウンジで発表しました。2年生は、この領域とともに歩んできた16ヶ月の学びをA2パネルに、授業で学んだ成果をA3にまとめています。レポートはファイルにまとめ、作品も何点か置きました。1年生は、実技科目「ヴィジュアルリテラシー1」「サウンドリテラシー1」から、ビジュアルボックス、カメラオブスクラ写真、サイン音を展示しました。

カード、写真集、ラジオ番組と、多岐にわたる展示からは、芸術教養らしい幅広い関心と興味が感じられたでしょう。初日には，学生のプレゼンがあり、個性にあふれながらも、それぞれの考えをしっかりと聴衆に話していました。非常勤教員スタッフ、外部の理解者、デザインの学生たちも足を運び、日曜のオープンキャンパスでは、多くの受験生が来場しました。リベラルアーツ=教養の長い歴史の端に、私たちも一歩を標すことができたでしょうか。

茂登山清文　　芸術教養領域 リベラルアーツコース教授
早川知江　　芸術教養領域 リベラルアーツコース准教授

Report 2　「FROM DENMARK 2018」
2018年6月1日［金］−6日［水］

美術領域アートクリエイターコースは、デンマークのVillage Association for Gludsted & environsとの交流の一環で、一年おきに作家を招いてアーティスト・イン・レジデンス「FROM DENMARK」を開催しています。デンマークとの交流は1999年から続いており、これまでおよそ30名の本学の卒業生や教員がデンマークで行われるアーティスト・イン・レジデンスに参加してきました。

今年度はヨーン・ミカエル・アンデルセン（Joergen Mikael Andersen）を日本に招き、大学からは、昨年7月にデンマークに招聘された本学アートクリエイターコース准教授の松岡徹、アートクリエイターコース卒業生の山本千晴と、2018年6月末に本学からデンマークのグルドゥステッド村（Gludsted）で開催された“International Art Workshop in Gludsted 2018”に招かれた本学日本画コース卒業生の磯部絢子とアートクリエイターコース卒業生の山本真弥圭がこのレジデンスに参加し、5月17日から約2週間、本学K109室で公開制作を行いました。その発表の場としてこの5人の作品と、学生たちが公開制作に混ざって制作したドローイングなどの作品もあわせて本学アート&デザインセンターで展示をしました。

松岡 徹　　美術領域 アートクリエイターコース准教授

Report 3　International Art Workshop in Gludsted 2018
2018年7月1日［日］−13日［金］

7月にデンマークのグルドゥステッド村で行なわれたワークショップに本学から２名参加してきました。現地では、デンマーク、ドイツ、ブラジルからの作家12名が村の小学校をアトリエ兼、宿泊施設として利用し公開制作をしながら作品を作り上げていきます。

アトリエには地元住民や新聞、子どもたちなど多くの人が毎日のように来校し、作品について興味をもって話しかけてきました。村中には、過去に行なわれたワークショップで制作された作品が常設展示されていたり、今回のワークショップ開催のちらしが多く貼られ、住民の生活に根強くアートやアーティストの存在が理解され浸透しているようにも感じました。

アートは“分からない”と思っている人にとっては、理解されにくいものなのかもしれません。しかし、今回ワークショップに参加してアートが自然な形で生活に溶け込んでいくことで、作品に関わらず当たり前の様な存在に変わっていくものだと思いました。村の子どもで「夢はアーティストだ」と誇らしげに語ってくれた彼が今でも強く印象に残っています。

磯部絢子

芸術一話　ART WORDS FROM THE ART WORLD 24

蒲郡市博物館学芸員
平野 仁也
Jinya HIRANO

多様性を尊重したい
（おもしろい人がいてもいい）

第24話　「若手アーティスト支援企画」をはじめた

地方自治体の学芸員として１７年目をむかえた。専門は日本史なのだが、勤務先は、田舎の小さな博物館なので、専門以外のこと、例えば、美術・自然のことなども、だましだまし（？）やっている。少子高齢化が進む中、「若者」が関係する取り組みを行いたいと思い、始めたのが「若手アーティスト支援企画」である。

博物館のギャラリーを、若手作家さんに一定期間使用料なしで使ってもらい、個展を開催していただくという企画である。博物館側としては、来館者の増加、作家さんとしては、個展開催という実績―双方にメリットがあるのではないかと考え企画した。

昨年、第１回目は、磯部絢子さん、山本千晴さん（ともに名芸をご卒業された方）に素晴らしい作品を出していただき、来館者も多く、ほっとひと安心。２回目の今年は、１回目の実績が評価され、若干ながら予算もついたので、出品者の方に少額だが謝礼をお渡しできるようになった。

この企画を職場で切り出した時、周囲から、「アートって市にとって必要なの？」と言われたことがあった。それに対する私の答えは、「アートは街のにぎわい」である。「楽しそうなことをやっていかないと、じわじわ暗い街になってしまいますよ。それでもいいんですか」と美術は専門外ながら、大いに力説した。この先、本企画はどうなってゆくのか―将来のことはわからないが、うまく続くことを願ってやまない。